

## 近代沖縄の芸術研究②

— 鎌倉芳太郎と比嘉朝健・琉球芸術研究の光と影 —

栗 国 恭 子

はじめに

近代沖縄における芸術研究は、末吉安恭や鎌倉芳太郎のほか、郷土史家の真境名安興、山城正忠、比嘉景常、末吉安恭の弟分的な存在の比嘉朝健らが行なっている。「近代沖縄の芸術研究①—末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎—」では、末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎の交流を通して、大正期の芸術研究を捉えた<sup>(註1)</sup>。本論は、末吉安恭と比嘉朝健、鎌倉芳太郎と比嘉朝健の交流を通して〈近代沖縄の芸術研究〉の様相を示し、比嘉朝健の芸術研究の紹介を目的としている。

鎌倉芳太郎と同年で大正期から昭和初期に精力的に中央美術雑誌に多くの論考を発表した比嘉朝健に関する研究は、ほとんど進んでいない。しかし比嘉の美術論考は、琉球の陶芸史、国王の肖像画である御後絵研究や琉球絵師の研究で、多くの研究者がこれまで参考引用している<sup>(註2)</sup>。一方で比嘉朝健の残した芸術研究は、その全体をふまえて整理されたことがなかった。本論のタイトルに「琉球芸術研究の光と影」という言葉を使用した。近代沖縄の芸術研究の分野で広く知られその研究に光があてられている存在が鎌倉芳太郎であるならば、同じように芸術研究の分野で成果を残しながら人物評価が確立されていない比嘉朝健は〈影〉のごとき存在といえよう。その〈影〉に少しでも光を当ててみたいと考えている。

比嘉朝健関係資料の掘り起こしは、故岸秋正氏（1995年没）の尽力が大きい。資料蒐集家として著名な岸氏は、時間をかけて丹念に県外発行の出版物から沖縄関係資料発掘し、沖縄の研究者、公的機関に寄贈や資料提供を続けてこられた。比嘉朝健のように研究論考のほとんどを中央の雑誌で発表してきた研究者の基礎資料は、残された確立の高い県外での地道な作業から得られていくものである。岸氏が長年にわたって集められた資料は、現在沖縄県公文書館に岸秋正文庫として所蔵されている。岸氏の集められた資料をもとに作業を進め、本論をまとめることができたことを記しておきたい<sup>(註3)</sup>。

## 1. 比嘉朝健の人となり

比嘉朝健の人となりを知る資料は、あまりにも断片的で詳細はよくわからない。比嘉朝健は、1898（明治32）年に父・比嘉次良（～大正8年旧12月9日没、享年62歳、正妻・比嘉カマド、旧姓宮城／1857年～1937年・昭和12年旧4月13日没享年80歳）と次良のなじみであった辻の女性との間に那覇で生まれた。正妻カマドとの間の次男として認知されている<sup>(註4)</sup>。朝健の父・次良は、尚順や古賀辰四郎、高嶺朝教、伊是名朝睦らと福州貿易調査会委員を務め活動する実業家で、中国福州から茶などの輸入や砂糖販売を広く商っていた。また、沖縄広運株式会社<sup>(註5)</sup>の運営でも尚順とつながりを持ち、次良の父は旧士族の出自で、当時那覇でも有数な経済的には恵まれた家庭であった。

比嘉朝健は、1886（明治19）年生まれ末吉安恭（麦門冬）より12歳年下で、鎌倉芳太郎とは同じ歳になる。

青年期の比嘉の動向はよくわからない点が多いが、一中へ入学し4年生頃中退し、1918（大正7）年10月の20歳の時「大空に一簇雲の漂ひてま昼の海に影黒う流る」の文章を、地元誌ではなく中央の雑誌『文章世界』<sup>(註6)</sup>に発表しており、早熟の文学青年像を伺い知ることが出来る。この時期に比嘉が生活の拠点を沖縄に置いていたのか、県外であったのかも定かではない。予測するに、その当時は安恭（麦門冬）らも沖縄を生活の拠点にしながら、中央の雑誌に精力的に文章発表をしていることから、比嘉も沖縄にいた可能性が大きい。あるいは父親の茶商事業を手伝いながら過していたのか。

比嘉は、28歳（昭和元年）頃に上京したと思われる。1926（昭和元）年6月には、東京帝大史料編纂所掛の立場で、琉球美術関係資料研究者として美術界では認識されている。当時の住まいは牛込区鶴巻町38大平荘であった（『支那書画人名辞典』169p、1926年発刊）。

上京してからの朝健は、琉球美術関係の論考を次々に発表していく。その分野は＜琉球の肖像画関係＞＜彫刻関係＞＜絵画関係＞＜陶芸関係＞＜その他＞に分かれている。東京に在りながら多くの家譜資料を整理しての翻刻紹介した文章も少なくない。

現在確認できる比嘉の琉球美術関係文章は、1936（昭和13）年40歳の時に書かれ、雑誌『好古』に発表された「琉球の陶器」が最後の文章である。その後刊

行された、それまで10年近く常連で投稿していた中央の美術関係雑誌に比嘉朝健の名を確認することは出来ない（資料2参照）。

朝健がいつ頃沖縄に帰郷していたのかは定かではないが、東京の施設で過ごした後1945（昭和20）年47歳の時に奈良で病死している。朝健は独身だったと思われる、その死は、奈良に出向いた甥の山里永吉によって確認されている。1938（昭和13）年40歳から亡くなるまでの7年間でどのように過ごしていたのだろうか。現時点では、この7年間は空白の時間になっている。この時間を埋める作業は今後の課題でもある。

比嘉朝健を「何者か？」と問えば、「戦前（大正末～昭和初期）の琉球芸術研究者」の何者でもない。しかし、一般的に人物評価として確立しておらず、1983年に発刊された『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社）にも取り上げられていない。その理由として①発表が中央雑誌であったこと、②その研究が戦前に発表され、その評価が地元知られる以前に若くして亡くなったこと、③大学などのアカデミックな機関ではなく、ある意味在野で研究を続けていた研究者であること、④研究を著作という形で残さなかったこと、⑤東京での沖縄文化研究者とのつながりが密ではなかったなどが考えられ、沖縄文化研究者としての位置づけも容易ではなかったといえる。

## 2. 末吉安恭と比嘉朝健の関わり

末吉安恭と比嘉朝健の関わりを見ていこう。

地元の新報や中央の雑誌で俳句や短歌等の詩歌、歴史、民俗、絵画、芸能、言語、戯曲、随筆、紀行に関する記事を発表する末吉安恭は、朝健よりも干支一回りも先輩である。こうした活動を展開する安恭は、少なからず文学に関心のあった朝健にとっては、気になる存在であったに違いない。20歳で中央の雑誌『文章世界』に「大空に一簇雲の漂ひてま昼の海に影黒う流る」の文章を寄せる文学青年の朝健ならば、地元文学同人誌『五人』（1914創刊）などで活躍するメンバーの安恭を知らないはずがない。

二人の交流のきっかけや始まった時期は定かではないが、後で触れる安恭の死を追悼する朝健の文章から察するに、二人は親密であったことがわかる。

末吉が琉球の絵師についてふれた最初の文章は、1917（大正6）年に『沖縄新

公論』第1巻第4号～第6号紙面で発表した「画聖自了」である。家譜を資料にした紹介文であった。1916（大正5）年にも友人の小橋川南村、山田真山とともに「自了と殷元了」について調査を行っている。そうした活動などは『琉球新報』紙面（大正5年3月5日）で記事になっている。そして1922（大正11）年春、麦門冬は美術史論考「琉球画人伝」を、主筆を務める『沖縄タイムス』紙（沖縄時事新報を改題し大正9年に創刊。現在の『沖縄タイムス』とは別）に連載した一ヵ月余り連載されたこの記事（現在原文の確認は出来ない）は、琉球王府の絵師・長嶺宗恭（華国）の「琉球歴代画人表」を元資料に書かれた優れた論文であった。その連載をきっかけに、東京美術学校図画師範科を卒業（大正10年）し、沖縄県の師範学校に赴任していた鎌倉芳太郎は、沖縄タイムス社脇に居を構えていた麦門冬の書齋を訪れ、二人の交流もはじまっている。

鎌倉と同じ歳である比嘉朝健の琉球美術に対する関心も、交流の始まる時期に違いはあれど安恭（麦門冬）の活動記事や連載に触発されて深まり、その交流を通して後に兄と慕うほど安恭と親しくなったのではないだろうか。

比嘉が残した琉球芸術関係の文章は、先述したが多くの家譜資料を基礎資料として絵師や陶工などの紹介をしている（資料1「比嘉朝健目録」参照）。こうした研究スタイルも安恭の「琉球画人伝」における資料展開と同様のスタイルで、朝健の琉球芸術理解に安恭が影響しているといえよう。

また、比嘉家は琉球絵画や漆器（旧尚家所蔵品を含む）の作品を多く所蔵していることから、安恭たちが調査に向いたり、朝健が作品に対して理解のアドバイスを受けたりする交流もあったのではないだろうか。1922（大正11）年及び1925（大正14）年に鎌倉が琉球芸術調査のため比嘉家を何度か訪問しているが、その紹介者も末吉安恭であった可能性も高い<sup>(註7)</sup>。

大正13年に安恭が突然に亡くなった際に『沖縄タイムス』に掲載された追悼文（『沖縄タイムス』大正13年12月16日）の中に朝健の名前が確認できる。連日の紙面に十数名が寄せた追悼文で朝健は、伊波普猷、伊波月城に続く3番手で掲載されている。以下が朝健の追悼文の一部である。

末吉安恭君を悼む（三）

「鳴末吉麦兄よ」 比嘉朝健

思い出せば、兄と予とが首里は電車停留所で兄はやがて来る終電車へと而して私は人力車へと乗って別れた。あの去月十八日の雨夜が兄と永久に別れる、最後の日でもあったね。丁度その頃だ、兄が家へ来る時折、館長の後任問題について昂奮の動悸にかられながら二人してよく語り合ったものだ。兄は郷土研究の中絶されん事を恐れて居るようだった。兄にして見れば、それは心痛であったに違いない。私達にしても亦、其れを考えないわけには行かなかった。私達友人は兄に館長を勧めながら而して兄はそれを徳望しつつも、運動の方法を知らなかったのだ。

兄にしたところで私達と同じく所謂社会的には無能力者の仲間と□□□（同じで？）なかったのか。私達友人はかくして鬱々と数日を送ってきた。兄も亦、寂寥の心持で越してきたのであったろう。兄と私とが僅かな知己を過信して頑なに閉ざされた心を叩いて見よう。そうすれば開かれん事もなかり。こう決心して首里は桃原の順男邸へ出かけたのが去月十八日の午後六時過ぎて間もない時分であったのだね。兄はそれでも不安らしげの面持ちであった。私達が電車を捨てた時、暗夜の雨は二人を寒がらせた。寒風と共に降り来る雨を斜めに受けながら、兄と私は寄り添うて、あの坂道を登って行った。広い邸は暗夜に深く眠れるが如く静寂に閉ざされていた。敷きつめられた青芝の上の雨水が露のように無算（無惨？）に輝いているのがガラスの障子越しにみられるのみであった。二人が薄暗い応接間へ通されて椅子に腰かけた時だ、兄は初めて安心した者の如くに「来て良かったね」と微笑したのであった。電球が取り換えられた後、あたりの静寂が猶はっきりと感じられた。鬱蒼たる高木の福木に冬雨が細々と降りしきって深暗の裡に滴水が落ちるのが詩□（心？）を起こさしめた。兄が縁側に立って「此う静かでは成るほどね、能く詩が出来るんだ」と私を振り向いて告げたのも其の時だった。

順男の「明後日上京で多事だけれども君等が折角那覇から来たのだから今晚は遅くまでお互いに話しよう」と開きなおられたのも二人には無上に嬉しかった。兄が静かに郷土研究の立場から順々としかも熱情の籠もった話しが終わった時、男は承諾されたのだった。心持ち強く男はなほ「東京に行ったら、ひと

つ話して見るから、まあ安心して居給へ、当分はまだ決定せないのだから」と付け加えられてちょっと出ていかれた。一中略一私達は厚遇されたのであった。兄は非常に喜んだ。而して私達が辞する時、順男は二人の為に大門を開かせた。寒風に吹きまくられながら相思者の如く、ぴったり兄と私が寄り添うて坂道を下りてきたのは、もう十二時近くであったのだろう。歩一步の石道をのみ力もとなげに光示す下男の提灯に送られてきたのであった。しかし何だか政治家の訪問の様な気持ちして厭な気分にはつを襲われたのだった。其処で私が「政治家の訪問みたいで嫌なこった」と云いながら唾をかつと吐き出したのであった。兄も亦そう概念だろう。けれども、「くすぐったあねえ」と暗に笑ったのが私に兄が見せた最後の笑いであったろう。嗚、こうして兄と私は其れから会わなんだのだ。－後略－ 『沖縄タイムス』大正13年12月16日

この追悼文は、最後に会った安恭の記憶を一つ一つ鮮明に記憶に刻むように、怒りも素直な若い朝健を笑いながら和らげるように、おおらかに対応する兄貴分安恭の姿を描いている。1924（大正13）年11月18日二人が尚順邸を訪問したのは、郷土研究のオピニオンリーダーである伊波普猷の東京行きが決定的となり、その後任が未定となっている県立図書館館長人事の件で、館長へ安恭をと願うためのものであった。

1910（明治43）年に県立沖縄図書館が創設され、郷土史料室開設から14年の歳月が流れていた。その間に館長の伊波は、「沖縄研究」に必要な郷土の歴史資料を真境名安興等と共に精力的に蒐集してきた。同時に琉球史の講演会を積極的に開き、『琉球人種論』、『古琉球』等の著書論文も次々と発表していた。琉球処分後30～40年の時間を示すこの時期に、日本化を推し進める政治的な力の壁、繁栄からは程遠い貧困が社会を覆う経済的事情等、幾多の問題を抱える沖縄社会の状況下にあって進めてきた郷土資料発掘の作業であった。

こうした伊波の活動を支えたのは、「日本国家に＜沖縄＞が正統な位置を獲得できるためには、沖縄が日本本土に完全に同化し、沖縄の社会や文化の個性を失うことではない。沖縄独自の文化、独自の社会を形成してきた歴史を認識したうえでそれを維持発展させることである」とする熱い＜沖縄への眼差し＞であった。

明治末から大正にかけて活躍したジャーナリスト・末吉安恭は、県立沖縄図書

館が創設された同じ年に、落紅の雅号で『スバル』（第2巻4号）に次の歌を発表した。

親の親の遠つ親より伝えたる この血冷やすな阿摩彌久（アマミク）の裔

当時の沖縄で推進されていく国家主義的な政策と近代化への胎動の中で、沖縄が持ち得た歴史そのものを見失いたくはないという強い思いが、南島の神々の末裔としての血、つまり民族としての血を熱く持ち続けたいとの発露となり、中央の雑誌へ発表されている歌である。

同じ時代を生き、沖縄への其々の思いを抱いた安恭と沖縄学の先駆者・伊波普猷の二人は、政治の場ではなく文化の場で交流し続けてきた。その舞台は主に県立図書館であった。

伊波が館長を勤める沖縄図書館には、図書資料、古文書、古籍類だけでなく、美術的価値の高い資料も少なくなかった<sup>(註8)</sup>。

また当時の図書館は、在沖縄ばかりでなく、河上肇、柳田国男、折口信夫等来沖した知識人達が交流を持っていた場所でもあった。当時の伊波が「私が蒐集した琉球史料を最もよく利用した人の一人」で「沖縄史鑑賞家としては沖縄一」だと語る安恭は、頻りに図書館を訪れている。伊波等の活動によって郷土資料室の資料が充実していく過程と、安恭がその資料を利用するために、図書館の伊波を訪れる度合いは同じ物であった。

1924（大正13）年、伊波は15年間の時間を過ごした県立図書館を退職し、沖縄を離れる決心をしていた。離任にあたっては、自ら沖縄各地を精力的に廻り、精魂こめて蒐集した資料を収めた県立図書館郷土資料室を、末吉安恭と真境名安興に任せる事を期待していた。この人選は伊波個人の考えだけではなく、県立沖縄図書館長の後任問題を扱う新聞紙面にも「学徒の研究所だから館長の選定は大いに注意を払う必要がある」、「後任館長として呼び声高い二人、真境名・末吉の両氏なら何れでも適任者」と論じられている。またこの件に関しては「大田朝敷も後任を希望している」との噂も聞こえていた。

こうした渦中に安恭と朝健は、尚順<sup>(註9)</sup>を訪ねたのである。

ソテツ地獄と呼ばれる程、沖縄社会の経済は切迫していた時代であった。沖縄の発展を、沖縄の行く末を熱狂的に議論していた知識人達が次々と沖縄を離れていた。その中でも沖縄に在って郷土研究の中心的役割を果たしていた伊波が、沖

縄を離れる事は郷土資料室存続への大きな柱を失う事を意味した。その後の郷土資料室の発展へ向けて暗い影を落としているかに思えた。不況時の文化施設運営に、行政サイドがどのような処置をするのか安心出来る状況ではなかった。安恭にとって、郷土研究の中断は心痛以外の何者でもない。

当時、末吉安恭や伊波普猷、真境名安興、太田朝敷は、和田知事を含めた沖縄史蹟保存会の調査委員のメンバーでも活動をともにしている<sup>(註10)</sup>。鎌倉は「一学究的ではあったがその資質は芸術家で、特に造形芸術には深い関心を持ち、琉球文化の研究者として知られ」ており「伊波普猷、真境名安興、末吉安恭、三氏を<琉球学者の三羽鳥>と呼んでいた」（鎌倉『沖縄文化の遺宝』167p）と当時の沖縄における文化研究者の安恭を位置づけている。

しかし、政治力を持つ官吏でもなく、社会的に力を持ち合わせてもいない一介の新聞記者として歩いてきた安恭は、政治的と呼ばれる種類の力も持ち合わせておらず、具体的な運動の方法を知らなかった。

安恭は、1915（大正4）年10月には、尚順らが設立した『琉球新報』を「閩族打破」を理由に、記者仲間の当真嗣合、仲吉良光、嘉手川重利、小橋川朝明らと退社した過去があり、別の新聞で言論を展開する安恭にとって、尚順邸訪問には多少の抵抗があった。尚順のような政治的な影響力を持つ存在に、図書館長職人事に関して配慮を要請する事は勿論、直接会って意見し自らの頭を下げる事すら、『琉球新報』退社以来、安恭にしてみれば想像つかなかったことだろう。

朝健にしても、沖縄広運棟の運営や実業界で尚順と共に活動していた父も5年前（大正8年）に他界しており、気軽に訪問を願い出る立場でもない。「僅かな知己を過信して頑なに閉ざされた心を叩いて見よう。そうすれば開かれん事もなかろう。」と決心しての尚順訪問は、こうした状況下で年下の朝健が奮起し、安恭を後押しして実現したと思われる。

安恭を兄と語る朝健、文中からは安恭が朝健の元を訪ね後任館長人事の件や研究のことを語り合い、今後の研究状況への憂いを同様に共有できる間柄であり、朝健が安恭を慕う思いが感じ取れる。

この追悼文が書かれた直後の12月20日には、郷土研究会を新しく組織化する計画を目的とした第1回会合が開催されている。その発起人には、伊波普猷、仲良朝助、太田朝敷、山城正忠、又吉康和、真境名安興、島袋源一郎らと共に啓明会

の助成を受けて、琉球芸術調査で半年前から沖縄に滞在していた鎌倉芳太郎も参加している<sup>(註11)</sup>。しかしそのメンバーの中には、比嘉朝健は不在である。

鎌倉は年明け早々に「円覚寺壁画考」を『琉球新報』紙面で発表（1月1日～11日）、翌2月28日には、首里市教育部会主催で「古琉球の美術」を講演、また古琉球芸術に関する写真数百枚の陳列しての展示会も同時に開催し、啓明会の芸術資料調査を着々と進めている。

こうした動向を朝健は、どうとらえていたのだろうか。安恭（麦門冬）の突然の死から約1年後の大正14年末ごろから比嘉朝健は、一周忌の追悼作業のように琉球芸術研究の論考を精力的に発表し始めるのである。それは、安恭の研究継承を自らの使命としたのか、同年代の鎌倉芳太郎の芸術調査研究の活動に触発されたものであったのか。同時の朝健の心情を確認出来る資料はほとんどない。

## 2. 鎌倉芳太郎と比嘉朝健のつながり——鎌倉の芸術資料調査で比嘉家の資料を調査——

近代沖縄の芸術研究の分野において末吉安恭（麦門冬）に影響を受けた、同年代の比嘉朝健と鎌倉芳太郎の関係を確認したい。

朝健の実家の比嘉家は、先述したようにいろいろな琉球絵画や漆器の作品を所蔵しており、その中には旧尚家所蔵の品々もあった。

鎌倉は、琉球芸術調査のために何度か那覇市西本町4-52の龍界寺小路にあった比嘉家を訪れている。

一度目は、1922（大正11）年9月5日に絵画を中心にした調査であった。鎌倉と朝健ともに24歳。当時の比嘉家は、朝健の父次良はすでに亡くなっており（大正8年没）、義理の母親カマドと若き家長の朝健が中心であった。鎌倉の芸術調査に対応したのも、朝健であったろう。

鎌倉が比嘉家で調査を行った作品は、①殷元良「秋景山水図」（遺341／目226.740.870）②毛長禧「牡丹尾長鳥図」（遺354／目101.868）③毛長禧「桃竹白鴨図」（遺355／目99.748）④毛長禧「鷹雀枯木芙蓉図」（356／目211.745.895）⑤毛長禧「梅尾長鳥図」（遺357／目22.747）⑥毛長禧「柳椿双鳩図」（遺358／目526.1118）⑦呉著温「雪景山水画」（遺375／目357）⑧我謝盛保「蘭の図」（目258）の8点である（番号の遺は鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』番号、目はガラス乾

板番号<sup>(註12)</sup>。

比嘉家が所蔵していた絵画資料では、佐渡山安健（毛長禧）の作品が多く、その中の「梅尾長鳥図」「雪景山水画」は現在沖縄県立博物館が所蔵している。

安恭は、本土出身の若き研究者・鎌倉の琉球芸術研究を〈期待〉とともに暖かく〈見守る〉役割を果たしている。鎌倉が安恭を訪問して日も浅い1922（大正11）年8月22日には、末吉の紹介状を持ち長嶺華国・長嶺宗恭（60歳）を首里儀保町の私邸に訪問調査している。こうして鎌倉の琉球芸術における絵師研究調査が本格的にはじまるのである。その直後の9月に比嘉家の所蔵する絵画類を鎌倉が調査実現できたのも同様に安恭の口添えがあつての実現であろう。

鎌倉が美術品調査の為に再度比嘉家を訪問したのは、1925年（大正14）年2月？である。二人が慕っていた安恭の死から約3ヶ月。この年に2度訪問し、陶器や漆器の調査を行っている。調査された作品は、①酒注（白ノハメコミ絵／523）「白土象嵌酒注（壺屋製）」（遺523/目1281）②五人弁当箱「識名園離宮桑木地蒔絵提重箱」（旧尚家所蔵／遺320・321）「識名園離宮桑木地蒔絵提重箱黒塗蒔絵盃台四方盆」③盃盆（ユホーボン）（遺323／目511、尚家旧蔵）④重箱「識名園桑木地蒔絵提重箱」（内は青塗、遺322／目512）⑤木皿（春慶塗、蒔絵／スケッチ資料あり）、の五点で尚家旧蔵品の漆器などである。

東京美術学校で美術研究や調査方法の教育を十分に受けた鎌倉の調査では、作品を写真撮影し、ノートに詳細にメモを書きとめ、採寸しながら丁寧にスケッチを記録している。専門的な芸術調査をする鎌倉の姿は、朝健にどのように映ったのだろうか。二人が影響を受けた安恭（麦門冬）の話題で時を過ごすことはなかったのだろうか。同じ興味を持つ琉球芸術に関して、語り合うことはなかったのだろうか。

安恭を慕う二人が親密になることが自然の成りゆきであるにもかかわらず、不思議な事に比嘉朝健が発表した琉球芸術関係の多くの文章にも、また鎌倉が琉球芸術調査の成果でまとめた『沖縄文化の遺宝』を中心にした文章にも、その中でお互いの存在に触れることは殆ど無い。朝健は、1925（大正14）年に安恭の親友でもあった真境名安興に同行し、尚家に残された国王の肖像画、御後絵を観ている。御後絵関係の資料が少ないことから、琉球歴代画家の家譜から情報を集め資料整理を行っている。この年の11月から「尚候爵家御後絵に就いて」を安恭が主

筆を勤めた『沖縄タイムス』紙面に掲載する。この比嘉の掲載記事の一部は、鎌倉の美術調査の記録ノート（沖縄県立芸術大学所蔵）に貼られている<sup>(註13)</sup>。同じ分野の研究者としてライバル心があったのか、朝健と鎌倉の心意は伺い知れないが、この年2月に沖縄の人々は、鎌倉が調査し撮影した数百枚の写真の展覧会で、琉球芸術品の奥深さに触れ、11月から約1ヶ月連載された「尚侯爵家御後絵について」で比嘉朝健という琉球芸術研究の若手研究者の名を知るのである。

### 3. 比嘉の琉球芸術研究の特徴—歴史文化史的研究・歴史文献・家譜資料中心—

比嘉朝健の琉球芸術研究の整理として、『国華』<sup>(註14)</sup>や『アトリエ』<sup>(註15)</sup>、『塔影』、『美術研究』といった中央の美術雑誌に発表された文章を分野別にまとめた目録が資料1「比嘉朝健目録」である。朝健の芸術研究を研究テーマ分野で整理すると、琉球国王肖像画（御後絵）を中心とする〈琉球の肖像画関係〉、〈絵画関係〉、〈彫刻関係〉、〈陶器関係〉、芸能研究を含む〈その他〉の五つに分かれている。その中でも肖像画を含め絵画関係の文章が多い。

比嘉の琉球芸術研究の最初の論考「尚侯爵家御後絵について」（大正14年11月7日～12月1日）は『沖縄タイムス』で連載されている。親しかった末吉安恭（麦門冬）の主筆勤めていた『沖縄タイムス』紙面で、その死を悼むかのよう一周忌の時期に合わせての連載であった。

「尚侯爵家御後絵について」で芸術研究者として世に出た朝健は、上京後に東京大学資料編纂所に勤務しながら中央の美術雑誌に次々に文章を寄せている。その時期は20代後半から40歳までと短く、大正末～昭和13年間の資料が残されている。

資料2「比嘉朝健・鎌倉芳太郎関連年譜」<sup>(註16)</sup>は、二人が同年代であることから、それぞれの琉球芸術研究の流れを年齢によって構成した資料である。あえて、比嘉朝健の亡くなった1945（昭和20）年までの情報を整理したものである。

分野別にまとめた資料1とは印象の異なる比嘉の研究の在り方や二人研究の違いが現れる。この資料で比嘉朝健の研究の特徴を見ると、1927（昭和2）年には彫刻関係の文書、1931（昭和6）年～35（昭和10）年には、絵画研究中心の文章、1935（昭和10）年～38（昭和13）年には絵画研究に加え陶芸研究の文章が多くなっ

てくる。こうした傾向から比嘉朝健の琉球芸術研究は、①沖縄に在っての「御後絵」研究②上京したばかりの時期20代後半での「彫刻」研究③30代前半での「絵画」研究④30代後半からの「絵画・陶芸」研究という、四つの時期によって扱うテーマが変化したことがわかる。二人の研究によってより広がりをもつ美術分野の一例が、家譜から得た画家の資料といえるだろう。

さらに比嘉朝健と鎌倉芳太郎の琉球芸術研究を比較すると、同様の芸術資料（円覚寺門や彫刻、首里城の獅子彫刻、絵画史料）を扱って論を展開しているが、鎌倉の撮影した琉球芸術写真とは異なる独自の写真を文とともに掲載している。さらに比嘉家が所蔵していた芸術作品についても、鎌倉の調査資料から理解することが可能でもある。

また、絵画研究で家譜を使い絵師を紹介する論考（比嘉「琉球歴代画家譜」、鎌倉（「首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜」『沖縄文化の遺宝』）では、それぞれ17人ずつを紹介している。

比嘉は、城間清豊<sup>(註17)</sup>、東風平喜俊<sup>(註18)</sup>、石嶺伝莫<sup>(註19)</sup>、石嶺伝福 上原真知、仲宗根眞秀、仲宗根眞裕、山口宗季、座間味庸昌、仲宗根眞補、屋慶名政賀、屋慶名政喜、小橋川朝安、島袋宗雍、泉川寛英、泉川寛郁、佐渡山安健<sup>(註20)</sup>の17名を紹介している。

鎌倉は城間清豊、呉師虔（山口宗季）、向受祐、殷元良（座間味庸昌）、向元瑚（小橋川朝安）、鄭嘉訓、毛盛輝、馬執宏、尚廷楷、毛徳潤、翁宏熙、毛長禧（佐渡山安健）、毛允良、毛文達、喜名里之子、向有章の17名を紹介している。

二人がそれぞれ紹介した絵師で重なるのは城間清豊（自了）、呉師虔（山口宗季）、殷元良（座間味庸昌）、向元瑚（小橋川朝安）、毛長禧（佐渡山安健）の5人だけである。鎌倉は、琉球絵画史の研究として、長嶺華国の「琉球歴代画人伝」及び末吉安恭の「琉球画人伝」を検討し、首里尚侯爵家図書室において、各画家の『家譜』を調査記録し、また同時にその遺作を捜求撮影し、これを比較研究して見た結果、琉球王朝時代、一流の画人として挙げられるのは、次の五名であるという結論に達した。自了・欽可聖城間清豊、呉師虔・山口宗季、殷元良・座間味庸昌、向元瑚・小橋川朝安、毛長禧・佐渡山安健（「首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜」『沖縄文化の遺宝』）という独自の見解に達している。比嘉の紹介した絵師で重なった5人である。

両者の研究を知ることによって私たちは、29人もの琉球の絵師たちの情報を、私達は得ることが可能である。それは家譜資料もと陶工を紹介した研究でも同様で、両者の研究成果を合わせることによって、私達はより充実した陶工達の家譜資料に触れることができるのだ。その中には現存しない家譜が多く、両者の残した研究はどちらも貴重なものである。末吉安恭の研究を鎌倉が参考とし、同じテーマを扱いながら比嘉は手法や資料を継承しつつも独自の展開を試みている。

### おわりに

同年代で琉球芸術研究に携わった比嘉朝健と鎌倉芳太郎は、琉球芸術研究にとってどちらも重要な研究者である。両者の研究を十分に視野に入れてこそ、琉球芸術理解はより深いものとなる。

今回は、比嘉朝健を中心に末吉安恭と関わり、鎌倉芳太郎との関わりから近代沖縄の芸術研究をとらえてみた。今回比嘉の研究は紹介できたが、その論考の詳細な内容分析と鎌倉芳太郎の芸術研究との比較、三者の琉球芸術研究史での位置づけなど、今後取り組まなければならない課題である。

今後、比嘉朝健関係の新たな資料の発掘も必要であり、今回提示した内容が再構成されることを望んでいる。

### 註

- 1 栗国恭子「近代沖縄の芸術研究②—末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎—」『沖縄芸術の科学第19号』沖縄県立芸術大学附属研究所紀要、2007年
- 2 御後絵及び絵画研究では上江洲敏夫、津波古聰、佐藤文彦、陶芸史研究では渡名喜明が比嘉の論考を幾度となく参考引用している。
- 3 1997年に佐々木和利氏（現国立民族博物館）の助言で東京国立博物館資料室の比嘉関連の文献を調査。1996年には、沖縄県公文書館から委託をうけ、岸秋正文庫資料整理を行った。
- 4 比嘉朝健の出自に関しては、新城栄徳氏からご教授いただいた。新城栄徳「琉球美術史家たち」『新生美術8／9合併号』60p、新生美術編集委員会、1990
- 5 沖縄広運株式会社は、1886（明治19）年に尚家を中心とする琉球国の支配層によって設立され翌年から開業した海運会社。球陽丸を所有し、那覇・奄美大島・鹿児島・

神戸・大阪などへ航路を広げ、1904年には広運丸も所有している。朝健の父次朗は、新聞等では「次郎」で出てくる。

- 6 『文章世界』は、1906（明治39）年3月に創刊され1921（大正10）年12月に『新文学』に改題され終刊されている。
- 7 前掲栗国
- 8 前掲栗国 136P
- 9 尚順、琉球最後の王・尚泰の四男。比嘉朝健の追悼文の男は、男爵（1896年）のこと。
- 10 『沖縄タイムス』1922（大正11）年10月19日
- 11 『沖縄朝日新聞』1924（大正13）12月19日金曜日、その他のメンバーには与儀喜明、川平朝令（女子師範学校教諭）、牛島軍平（二中教諭・折口信夫の弟子）などがある。
- 12 沖縄県立芸術大学附属研究所編『沖縄県立大学附属図書・芸術資料館所蔵鎌倉』
- 13 鎌倉の芸術調査ノート81冊（国指定重要文化財）、目録は註12参照
- 14 『国華』1889（明治22）創刊された美術雑誌。創刊号から大正初期まで英語版も出され国内はもとより、外国へも日本の古美術を研究紹介する役割を果たす。現在まで継続し1000号を越えている。
- 15 『アトリエ』は大正13年（1924年）2月山本鼎の企画によって北原義雄（北原白秋の実弟：1896～1980）の創立したアトリエ社から創刊された美術月刊誌。
- 16 参考資料『琉球の至宝と型絵染—人間国宝鎌倉芳太郎の全仕事—』香川県文化会館、2003（平成15）年、原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と芸術観の変遷」『沖縄芸術の科学』第11号、1999年、沖縄県立芸術大学附属研究所
- 17 城間清豊（1614・10・18～1644・10・18、雅号：自了、唐名：欽可聖）「白沢の図」「竹林七賢」「野国青毛名馬図」（27歳の作絶筆）「仙人図」「高士逍遥図」「松下三仙図」の作品。
- 18 東風平喜俊（崎山喜俊1626・10～1687・126、唐名：李基昌）23歳の時に絵師となり、薩摩藩の絵師内藤等甫に師事して日本画を学ぶ。1674年南風原間切崎山地頭に任命され崎山姓を名乗る。
- 19 石嶺伝莫（牧志伝莫、1658・10・18～1703・5・16、唐名：琥自謙）21歳で絵師となり、福州に留学し画家孫億、王調鼎に師事。御書院御座絵、国王の御後絵、王女の婚礼衣装の図案下絵、円覚寺仏殿の絵などを描いた。作品は現存しない。

- 20 佐渡山安健（1806・12・8～1865・5・29、唐名：毛長禧）尚灝王、尚円王、尚育王、尚元、尚永、尚純、尚禊王の肖像画や、花長図や動物画を描いている。

#### 資料1 「比嘉朝健目録」

##### 1) <琉球の肖像画関係>

- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月7日～12月1日『沖繩タイムス』
- ・「琉球の肖像画と其進展」『塔影』12月号 第12巻第12号 29-38p、1936（昭和11）年、塔影社
- ・「琉球の歴代国王画像に就いて（上）」『国華』553号366～372p、1936（昭和11）年
- ・「琉球の歴代国王画像に就いて（中）」『国華』555号60～65p、1937（昭和12）年2月
- ・「琉球の歴代国王画像に就いて（下）ノ一」『国華』557号121～125p、1937（昭和12）年4月
- ・「琉球の歴代国王画像に就いて（下）ノ二」『国華』559号182～188p、1937（昭和12）年6月

##### 2) <彫刻関係>

- ・「琉球石彫刻龍柱」『アトリエ』第4巻第3号12～21p、1927（昭和2）年
- ・「琉球に於ける孔子の塑像に就いて 1」『国華』442号259～263p、1927（昭和2）年9月
- ・「琉球に於ける孔子の塑像に就いて 2」『国華』445号343～347p、1927（昭和2）年12月
- ・「国宝琉球円覚寺両脇石門に就いて」『アトリエ』10巻2号45～48p、1933（昭和8）年2月
- ・「琉球の石彫刻」『塔影』13巻3号、1937（昭和12）年3月、塔影社

##### 3) <絵画関係>

- ・「殷元良筆 粟鶉図解」『国華』489号242p、1931（昭和6）年8月
- ・「自了筆 野国馬図解」『国華』495号49～50p、1932（昭和7）年2月
- ・「狩野安信と琉球の画人自了」『塔影』10月号第9巻第8号41～44p、

1933（昭和8）年 塔影社

- ・「琉球の画家殷元良筆山水画に就いて」（絵4枚あり）『塔影』2月号 第9巻第2号4～9p、1933（昭和8）年、塔影社
- ・「探元の三暎庵随筆と琉球人」『書物評論』第1年3号9月号82～88p、1934（昭和9）年9月、建設社
- ・「筆山主人の蘭画に就いて」『塔影』8月号 第10巻第8号 23p～25p、1934（昭和9）年、塔影社
- ・「琉球の画家呉著温一雪中山水図について一」（絵3枚あり）『塔影』4月号 第12巻第4号、1936（昭和11）年、塔影社
- ・「東京帝室博物館所蔵の二琉球画」『中央美術』第39号（通巻202）、1936（昭和11）年 中央美術社
- ・「清朝御物尚侯爵家の章声筆雪中花鳥図」『塔影』12月号第13巻第12号26～28p、1937（昭和12）年、塔影社
- ・「琉球歴代画家譜（上）」『美術研究』45号21～28p、1935（昭和10）年9月、美術研究所
- ・「琉球歴代画家譜（下）」『美術研究』48号22～34p、1935（昭和10）年12月、美術研究所

4) <陶器関係>

- ・「琉球の陶器」『陶器講座』第2巻1～30P、1935（昭和10）年、雄山閣
- ・「琉球の陶器」『好古』第1巻第5号、1938（昭和13）年、日本美術社
- ・「琉球歴代陶工家譜（上）」『美術研究』49号29～36p、1936（昭和11）年1月、美術研究所
- ・「琉球歴代陶工家譜（中）」『美術研究』50号26～30p、1936（昭和11）年2月、美術研究所
- ・「琉球歴代陶工家譜（下）」『美術研究』52号27～34p、1936（昭和11）年4月、美術研究所

5) <その他>

- ・「大空に一簇雲の漂ひてま昼の海に影黒う流る」『文章世界』。1918（大正7）年10月
- ・「末吉安恭君を悼む」『沖繩タイムス』1924（大正13）年12月16日

- ・「琉球人の「江戸登」と江戸城中に於ける琉球三味線の演奏」『浮世絵芸術』第4巻第8号p10-12、1935（昭和10）年8月、巧芸社

## 資料2

### 「比嘉朝健・鎌倉芳太郎関連年譜」

・は比嘉朝健関連 \*は鎌倉芳太郎関連

1898（明治32）年 那覇生れ。 \*鎌倉芳太郎と同年生まれ

- ・父比嘉次良（□□～大正8年旧12月9日没・享年62歳、法喜庵釋誠永信士）
- ・母比嘉カマド（旧姓宮城／1857年～1937年・昭和12年旧4月13日没、享年80歳・釋妙安信尼）の次男として生れる。実母は父次良と親しかった辻の女性である。父次郎と沖繩広運榎で尚順と関連

\*鎌倉 賀川県木田郡氷上村に父宇一、母ワイの長男として生まれる。

1918（大正7）年 20歳

- ・「大空に一簇雲の漂ひてま昼の海に影黒う流る」『文章世界』1918（大正7）年10月
- \*鎌倉 賀川県師範学校を卒業し、東京美術学校図画師範科に入学。

1921（大正10）年 23歳

\*鎌倉：5月 沖繩県女子師範学校及び第一高等学校教諭赴任（勤務2年）。

1922（大正11）年 24歳

春「沖繩タイムス」に末吉安恭の「琉球画人伝」が数週間にわたり掲載。

\*鎌倉：末吉安恭を訪問、伊波普猷、真境名安興を訪ねる。

\*9月5日 鎌倉芳太郎が比嘉家（龍界寺小路）を訪問。【ノート26-507】

美術品調査。①殷元良「秋景山水図」（遺341／目226.740.870）②毛長禧「牡丹尾長鳥図」（遺354／目101.868）③毛長禧「桃竹白鴨図」（遺355／目99.748）④毛長禧「鷹雀枯木芙蓉図」（356／目211.745.895）⑤毛長禧「梅尾長鳥図」（遺357／目22.747）⑥毛長禧「柳椿双鳩図」（遺358／目526.1118）⑦吳著温「雪景山水画」（遺375／目357）（資料あり）⑧我謝盛保「蘭の図」（目258）の8点である（番号の遺は鎌倉芳太郎著『沖繩文化の遺宝』番号、目はガラス乾板番号<sup>(註12)</sup>）

1923（大正12）年25歳

\*鎌倉 4月東京美術学校研究科(美術史研究)へ入学。琉球研究資料を正木直彦校長へ提出。その紹介で東京帝国大学伊東忠太教授の指導を受ける。

1924(大正13)年26歳

\*鎌倉 2月28日~4月12日「八重山芸術の世界的価値/近代芸術に於る新しき指針」45回『沖縄タイムス』掲載。

\*鎌倉 5月~翌年4月まで第一回琉球芸術調査事業で来沖。7月下旬伊東忠太調査に合流。首里市役所内に写真暗室を設備、尚家、首里、那覇の美術品を調査撮影する。首里城国定指定のための撮影など資料作成。

・比嘉11月18日末吉安恭と同行して尚順邸を訪問。11月25日末吉安恭(『沖縄タイムス』主筆)突然の死去。

・「末吉安恭君を悼む」『沖縄タイムス』12月16日

\*鎌倉 12月20日沖縄郷土研究会設立に向けて伊波普猷、真境名安興らと発起人の一人となる。

1925(大正14)年27歳

・真境名安興に同行し、尚家の御後絵を観る。その後資料を整理する。

\*鎌倉 「円覚寺壁画考」鎌倉春熙 『琉球新報』1月1日7、10、11日

\*鎌倉 1月29日「特殊資料を蒐集して・偉大なる琉球芸術の価値を世界に紹介する、啓明会の事業と鎌倉氏の努力」の記事。『沖縄朝日新聞』

\*鎌倉 2月28日 首里市教育部会主催の講演会「古琉球の美術」PM2時第二小学校、古琉球芸術に関する写真数百枚の陳列しての展示会も同時開催。

\*鎌倉 2月?2度比嘉家(那覇市西本町)へ訪問し、美術品調査。

①酒注(白ノハメコミ絵/523「白土象嵌酒注(壺屋製)」(遺523/目1281)

②五人弁当箱「識名園離宮桑木地蒔絵提重箱」(旧尚家所蔵/320・321)「識名園離宮桑木地蒔絵提重箱黒塗蒔絵盃台四方盆」③盃盆(ユホーボン)(遺323/目511尚家旧蔵)④重箱「識名園桑木地蒔絵提重箱」(内は青塗)(遺322/目512)⑤木皿(春慶塗、蒔絵/スケッチ資料あり)。

\*鎌倉 5月に東京美術学校美術史研究室に帰校。資料を研究室へ

\*鎌倉 9月5日~7日 琉球芸術展覧会(啓明会主催 東京美術学校会場)。鎌倉が蒐集した約2000点及びその他借入品併せて3000点。講演内容:「琉球

史概観」東恩納寛惇「南島研究の現状」柳田國男、「古琉球の歌謡に就きて」伊波普猷、「琉球美術工芸に就きて」鎌倉芳太郎、「琉球芸術の本質」伊東忠太、「琉球の音楽に就きて」山内盛彬。

- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月7日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月8日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月10日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月11日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月12日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月14日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月15日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月17日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について」大正14年11月17日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(11)」大正14年11月19日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(12)」大正14年11月21日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(13)」大正14年11月22日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(14)」大正14年11月25日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(15)」大正14年11月26日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(16)」大正14年11月27日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(17)」大正14年11月29日『沖繩タイムス』
- ・「尚侯爵家御後絵について(18)」大正14年12月1日『沖繩タイムス』

1926（昭和元年）28歳

- \* 鎌倉 10月10日 「琉球神座考断章（上）」鎌倉春熙 『沖繩教育』第157号
- \* 鎌倉 11月10日 「琉球神座考断章（下）」鎌倉春熙 『沖繩教育』第158号
- ・ 比嘉朝健 この頃に上京か？

1927（昭和2）年29歳

- ・ 比嘉 6月 東京帝大資料編纂掛、琉球美術関係資料研究、牛込区鶴巻町38大平荘（『支那書画人名辞典』169p、1926年発刊）
- ・ 「琉球石彫刻龍柱」『アトリエ』第4巻第3号12～21p、1927（昭和2）年
- ・ 「琉球に於ける孔子の塑像に就いて 1」『国華』442号259～263p、1927（昭和2）年9月

・「琉球に於ける孔子の塑像に就いて 2」『国華』445号343～347p、1927  
(昭和2)年12月

\*鎌倉10月10日「私立琉球炭鋳尋常小学校参観記」『沖縄教育』165号

1928(昭和3)年30歳

\*鎌倉 1月25日～29日 銀座松屋呉服店で古琉球「紅型」衣裳展覧会、4月  
啓明会から補助。9月6～8日「琉球朝鮮波斬印度展覧会」講演会：紅型を  
中心とする染織工芸資料3,000点を展示。講演会「東洋藝術の系統」伊東忠  
太、「琉球染色に就きて」鎌倉芳太郎ほか。

1930(昭和5)年32歳

\*鎌倉 4月東京美術学校にて「東洋絵画史」講座担当

1931(昭和6)年33歳

・「殷元良筆 栗鶉図解」『国華』489号242p、1931(昭和6)年8月

1932(昭和7)年34歳

・「自了筆 野国馬図解」『国華』495号49～50p、1932(昭和7)年2月

\*鎌倉 正木校長退任のため東京美術学校にて「東洋絵画史」講座を担当

1933(昭和8)年35歳

・「国宝琉球円覚寺両脇石門に就いて」『アトリエ』10巻2号45～48p、1933  
(昭和8)年2月、

・「狩野安信と琉球の画人自了」『塔影』10月号 第9巻第8号 41～44p、  
1933(昭和8)年 塔影社

・「琉球の画家殷元良筆山水画に就いて」(絵4枚あり)『塔影』2月号 第9  
巻第2号4～9p、1933(昭和8)年、塔影社

\*鎌倉 8月から那覇天尊廟において「歴代宝案」を調査。

1934(昭和9)年36歳

・「探元の三暎庵随筆と琉球人」『書物評論』第1年3号9月号82～88p、  
1934(昭和9)年9月、建設社

・「筆山主人の蘭画に就いて」『塔影』8月号 第10巻第8号 23p～25p、1934  
(昭和9)年、塔影社

1935(昭和10)年37歳

・「琉球歴代画家譜(上)」『美術研究』45号21～28p、1935(昭和10)年9月、

美術研究所

- ・「琉球歴代画家譜（下）」『美術研究』48号22～34p、1935（昭和10）年12月、美術研究所
- ・「琉球の陶器」『陶器講座』第2巻1～30p、1935（昭和10）年、雄山閣
- ・「琉球人の「江戸登」と江戸城中に於ける琉球三味線の演奏」『浮世絵芸術』第4巻第8号10～12p、1935（昭和10）年8月、巧芸社

1936（昭和11）年38歳

- ・「琉球の歴代国王画像に就いて（上）」『国華』553号366～372p、1936（昭和11）年
  - ・「琉球の肖像画と其進展」『塔影』12月号 第12巻第12号 29-38p、1936（昭和11）年、塔影社
  - ・「琉球の画家呉著温一雪中山水図に就いて一」（絵3枚あり）『塔影』4月号 第12巻第4号、1936（昭和11）年、塔影社
  - ・「東京帝室博物館所蔵の二琉球画」『中央美術』第39号（通巻202）、1936（昭和11）年 中央美術社
  - ・「琉球歴代陶工家譜（上）」『美術研究』49号29～36p、1936（昭和11）年1月、美術研究所
  - ・「琉球歴代陶工家譜（中）」『美術研究』50号26～30p、1936（昭和11）年2月、美術研究所
  - ・「琉球歴代陶工家譜（下）」『美術研究』52号27～34p、1936（昭和11）年4月、美術研究所
- \*鎌倉 12月～翌年1月 第三回琉球芸術調査事業 発掘調査のため沖縄本島に赴く。

1937（昭和12）年39歳

- \*鎌倉 1月首里城、浦添グスク、照屋グスク址発掘調査。
- ・「琉球の歴代国王画像について（中）」『国華』555号60～65p、1937（昭和12）年2月
- ・「琉球の石彫刻」『塔影』13巻3号、1937（昭和12）年3月、塔影社
- ・「琉球の歴代国王画像について（下）ノ一」『国華』557号121～125p、1937（昭和12）年4月

・「琉球の歴代国王画像について（下）ノ二」『国華』559号182～188p、1937（昭和12）年6月

・「清朝御物尚侯爵家の章声筆雪中花鳥図」『塔影』12月号第13巻第12号26～28p、1937（昭和12）年、塔影社

\*鎌倉 10月伊東忠太共著『南海古陶瓷』、宝雲社。

1938（昭和13）年40歳

・「琉球の陶器」『好古』第1巻第5号、1938（昭和13）年、日本美術社

1939（昭和14）年41歳

\*鎌倉 4月 東京美術学校にて「東洋美術史」「日本美術史」「東洋彫刻史」講座担当

1942（昭和17）年44歳

\*鎌倉 9月 東京美術学校助教授に任命される。

1944（昭和19）年46歳

\*鎌倉 東京美術学校助教授、物品（図書・標本）会計官吏。以降、財団法人啓明会補助「琉球芸術調査並びに報告書作成」事業に専念する。

1945（昭和20）年47歳

・比嘉は、東京近郊の施設で廃養後、奈良で病死。甥の山里永吉がその死亡を確認したとされている。享年47歳。

\*鎌倉 3月自宅戦災にあい、蔵書3,000点及び東洋美術史研究資料全部焼失。但し、琉球芸術資料（数千点）は東京美術学校文庫保存のため焼失を免れる。